悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.17
Nov. 11月
2015年11月20日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

「悠久の河」意宇川紀行 ⑥

『意宇六社めぐり』八重垣神社と鏡池の謎

「出雲の国は意宇郡、佐草村にある八重垣神社へ、恋をしている若い男女はみな参詣にくる」。1891年（明治24年）4月に「意宇六社めぐり」に出たラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、その時のことを、歌い上げるようなこの1行から始まる「八重垣神社」という題の文章（『知られぬ日本の面影』所収）にまとめています。今もこの神社は、島根県内では、「平成の大遷宮」で全国的に有名な出雲大社に次ぐ参詣人があり、とくに「縁結び」で、女性の人気を集めています。

八重垣神社鳥居

◇八重垣神社

松江市佐草町に鎮座するこの神社の祭神は、スサノオノミコトとイナタヒメノミコト（稲田姫命）のご夫婦。スサノオが八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治する時、「八重垣」を作ってイナタヒメをかくまった所と伝わっています。

『御由緒』には「我が国の縁結びの大祖神（おおおやがみ）、家庭和楽、子孫繁栄の大神」とあります。

境内には、根が別の2本の木が、地上で一体になった「夫婦椿」あるいは「連理椿」と呼ばれる木が3本あり、「一心同体」、愛の象徴として神聖視されています。

また、摂社の山神社は「子宝の神様」として信仰を集めています。立派な男性のシンボルが供えられた社（やしろ）に向かって手を合わせる若い女性の姿には、ひたむきさと同時に、性におおらかな古代の風（ふう）も漂っています。

山神社

夫婦椿

本殿後方の奥の院「佐久佐女（さくさめ）の森」には、避難中のイナタヒメが、鏡代わりに姿を映し、化粧をしたと伝わる「鏡の池」があります。ここは「縁結び占いの池」として、当社の一番人気となっています。

鏡の池

社務所で売られている薄い半紙に、十円もしくは百円硬貨を乗せて池に浮かべ、早く沈めば良縁早く、遅く沈めば縁が遅い、また紙が遠くの方へ流れていけば遠くの人と縁があり、近くに沈めば身近な人と縁づくとされています。ここでも、半紙の行方に目をこらす女性のひたむきな姿が多くみられます。

国の重要文化財に指定されている壁画も人気を集めています。スサノオ、イナタヒメはじめ六神像が描かれた壁画（板絵著色神像）は元々本殿にあり非公開でしたが、保護のために宝物収蔵庫に移され、公開されているものです。南北朝時代ないし室町時代（14～16世紀）に描かれたものと推定されていますが、イナタヒメの頬の薄紅、衣の萌黄（もえぎ）など鮮やかな色彩に目を奪われます。

ところで、当社には相殿（あいどの＝合祀の社殿）として、ご夫婦の子であるアオハタサクサヒコノミコト（青幡佐久佐日古命）も祀られています。『出雲国風土記』に「佐久佐社」、『延喜式』神名帳に「佐久佐神社」とあるのが当社という説もあり、代々、佐草家が宮司をつとめています。

『古事記』には、スサノオはオロチ退治の後、「須賀の地においでになって、『私はここに来て、気分がすがすがしい』と言われて、そこに新居の宮を造ってお住みになった。そして『八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣造る　その八重垣を』という歌を詠（よ）まれた」とあります。

当社『御由緒』には、「須賀の里よりさらに姫命の避難地であった当地にも宮造りされ、ここで夫婦生活を始められた所」とあり、やや複雑な経緯が感じられます。

当社の創建は「遠く太古」とされています。たしかに、「鏡の池」は古墳時代（3世紀後半から7世紀）にさかのぼる水霊信仰の遺跡として知られています。水の神を祀（まつ）るために、池に投じられた土器や形代馬（かたしろうま）などが発見されており、周辺も古代文化埋蔵地帯とされています。ただ、この地の神社として「遠く太古」にさかのぼるのは、佐久佐神社なのではないでしょうか。

というのも、中世（12～16世紀）に、佐久佐神社に八重垣神社すなわち スサノオとイナタヒメが合祀され、以来、その社名が主になり、現在のような縁結びの神として広まったとされているからです。正式に八重垣神社に改称したのは1878年（明治11年）のことだそうです。では、いったい、元々の八重垣神社はどこにあったのでしょうか？

◇ふたつの鏡池

ここで、しばし意宇川を離れ、出雲の奥深い神話の森に分け入ってみることにしましょう。

『古事記』には、「スサノオノミコトは出雲国の肥河（ひのかわ）の川上の鳥髪（とりかみ）というところにお降（くだ）りになった。このとき、箸が川を流れ下って来た」とあります。川上に向かっていったスサノオは、足ナヅチと、妻・手ナヅチ、その娘のイナタヒメに出会い、ヒメを救うためにオロチ退治に乗り出すことになります。

ここに出てくる「肥河」とは斐伊川のこと。島根県南部の雲南市木次町、仁多郡奥出雲町などの斐伊川流域には、多くのヤマタノオロチ神話伝承地が残されています。

奥出雲町佐白（さじろ）の県道25号沿いには、とくにオロチ伝承地が集中しています。八頭（やと）坂という地名は八岐大蛇（ヤマタノオロチ）にちなんでおり、オロチが休んだという八頭滝もあります。また、イナタヒメの両親が住んでいたという「長者屋敷跡」があり、そこにはかつて「連理椿」も生えていたというのです。さらに、ヒメが髪を結うための「元結（もっとい）」を掛けたという松の伝承もあります。

極めつけは「鏡池」の存在です。松江市佐草町の八重垣神社の池は「鏡の池」ですが、ここには泉谷「鏡ヶ池」という石標が建っています。「鏡の池」と同様に、イナタヒメがこの池を鏡にして髪をととのえ、化粧など身づくろいしたと伝えられているのです。また、案内板には、スサノオがオロチを退治するときに、この水で度の強い八塩折（やしおおり）の酒を醸し、これに酔いしれたオロチにミコトが切りかかった、とあります。

そして、この「鏡ヶ池」の県道をはさんだ向かい側の石段を登ると、「元」八重垣神社跡があり、「八重垣大神」という石碑が建っています。

泉谷鏡ヶ池石標

鏡ヶ池

元八重垣神社石碑

社殿は、1907年（明治40年）に行われた神社合祀によって、1㎞ほど南の伊賀武（いがたけ）神社に移され、鎮座しています。八重垣神社のルーツがここにあったのです。

この地域にもともとあった伝承が『古事記』に取り上げられたのか、『古事記』記載の神話をもとにして伝承が生まれたのか、わかりません。しかし、長い世代にわたって多くの人々に崇敬されることにより、その地は「力」を帯びるのではないでしょうか。佐草の町の八重垣神社にも、この地から引き継いだスサノオとイナタヒメの「神威」が満ちているからこそ、多くの参拝者に慕われているのでしょう。

（交易場修）

◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。

ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。